

ひかりのこ

2月園便り
聖ミカエル幼稚園
2018年1月25日

月主題：育ちあう

「共に育てる」

先日、紀伊国屋の4階にある北海道教育大学のサテライトで、「幼稚園と小学校教師たちの保護者支援に関する交流を目的としたワークショップ」が開かれ、聖ミカエル幼稚園からも私を含めた8名が参加し、小学校の先生方と交流を持ちました。そこで改めて感じたのは、幼稚園と小学校の保護者とのつながりの違いです。

幼稚園は、毎日のように保護者の皆さんと職員のだれかが、顔を合わせたり、言葉を交わすことができます。その中で、その日気になっていること、気づいたことを相談することができます。お子さんのできるようになったこと、ちょっとしたうれしいエピソードも伝えあい、共に喜ぶことができます。

幼稚園の職員とお母さん方の距離が近いだけでなく、お母さん同士も、サークルや、役員の活動や、降園後のちょっとした時間に言葉を交わり、先輩お母さんに相談をしたりできます。お父さん方も、父の会に参加し、幼稚園を介して、とても素敵なたつなかりを持たれています。お子さんの送り迎えが必要な幼稚園だからこそ、このようなつながりが必然的に生まれてくるのです。

一方、小学校では、そんなに毎日学校の先生と顔を合わせることはありません。個人懇談会や、家庭訪問といった、年数回の中で担任の先生と協力していかなくてははいけません。数回しか会えない中で、人間同士が分かりあうことはとても大変なことです。ワークショップでお話を聞いた小学校の先生は、この数回しかない機会に、「とにかく保護者と仲良くなる。子どものことを話せる仲になる」よう、心がけているそうです。

私もよく、小学校にお兄ちゃん、お姉ちゃんがいるお母さんから相談を受けることがあります。「担任の先生に、こんなこと相談していいのだろうか。」「こんな配慮をしてほしいんだけど、誰に言ったらいいのだろうか。」などです。そんな相談に対しては「学校や担任の先生を信頼して、どんどん相談した方がいいですよ。保健室の先生や、総務の先生や、教頭先生にお話するのもいいのでは。」と答えます。

私も6年前まで中学校でクラスを持っていました。学校としては、「気になったらどんどん相談してほしい、子どもたちの正確な情報が欲しい」、と思うのですが、幼稚園のようなつながりではないため、保護者は「相

談しづらい」と感じてしまうのかもしれませんが。しかし、子どものためには、子どもを取り巻く大人たちがみんなで協力しなければ、子どもはよく育ちません。子どもは大人一人では育てられません。家族だけでも育てられません。社会のみんなで育てるものです。一番身近な幼稚園や小学校の先生方に声をかけて、共に子ども育てようと心がけることは、とても大切なことだと思います。

園長 渡部 良子

キリスト教保育

希望をもって

先日、私が管理しているもう一つの教会、新札幌聖ニコラス教会で葬儀がありました。喪主は40代の独身男性でした。4年前に父親を亡くし、今回お母様を亡くし、家族は彼一人となりました。残された彼が感じているであろう失意や孤独感は想像に難くありません。そんな彼を思ってか、お母様は闘病中、終始、毅然としていて、悲しむ姿を見せたり、後悔を口にするようなことはありませんでした。自分がそのような姿を見せれば息子が動揺し、辛い思いをさせることを気遣ってのことでしょう。

私たち教会の者も、彼をどうやって励ますか、何と声をかけてよいのか、危篤になった頃からずっと考えていました。しかし、ただ見守ることしかできません。

教会の葬儀では、最後に必ず家族が直接、参列者に挨拶をします。その挨拶の中で彼は、最後の時をお母様と過ごし、死を前にしても、そこには感謝と希望があったと言われました。そして、そのように感じさせてくれたのは、直接声をかけてくれた人はもちろん、何も言わず寄り添い、陰で祈ってくれた多くの人々のおかげ、と言われました。とても感動的なお葬式でした。

親子の関係というのは、死の瞬間まで続いていきます。いや、亡くなってもなお、続くのかも知れません。感謝と希望は表裏一体です。限りある私たちの人生の時間、何が起こっても心に希望があるように、日頃から感謝の心で過ごしたいものです。

チャプレン 司祭 下澤 昌